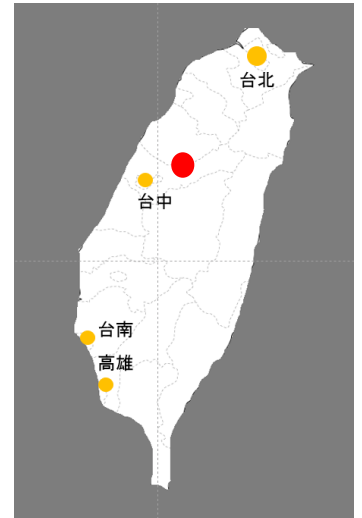


## Gaga に学ぶ「部落共同厨房」・達観部落 —部落支援 13 年の実践を経て新段階へ

くらし学際研究所・チーム〈近隣アジアを知る〉

垂水英司



私は今（2005年）、タイヤル族の達観部落に来ている。台中市を出発して苗栗縣との縣境を流れる大安溪沿いに車を走らせて1時間半、やっと戸数120戸の小村に辿り着いた。道路を挟んだ向こう側には広々とした大安溪が流れている。この大安溪沿いには達観、双崎、象鼻など13のタイヤル部落が点在しているが、921地震によってほぼすべての集落で被害が発生した。13部落の中、達観は際だった特色もなく、路ゆく車もうっかりすると通り過ぎるほどだ。今日この部落に来たのは、NGOの黄盈豪さんらがタイヤル部落の復興支援拠点として建設した「部落共同厨房」を訪ねるためである。



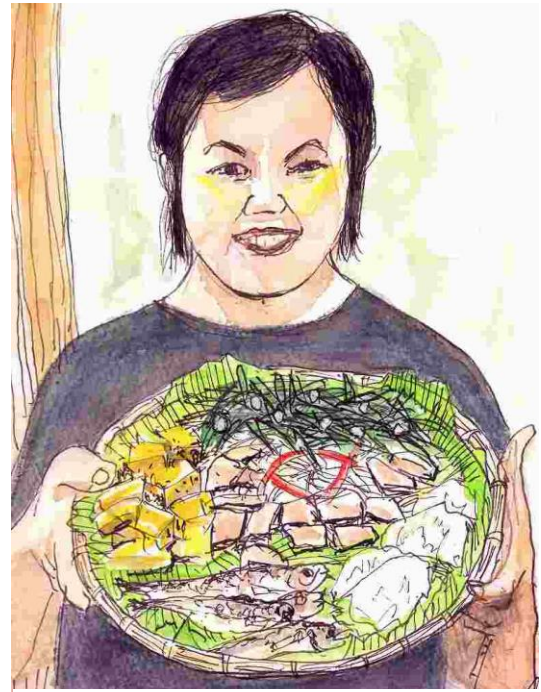
福祉ボランティアとして震災後達観部落に入った黄盈豪は、仲間たちと共に部落共同厨房を作った。「食べる」という原点から出発して、共に分かち合えるコミュニティを取り戻そうと活動を始めた。

921地震が発生すると、福祉分野のNGO中華至善社会服務協會は大安溪流域で医療支援や児童、青少年、高齢者への福祉活動を展開するため、双崎部落に「大安溪部落工作ステーション」を設立した。その活動リーダーになったのが、国立政治大学で社会工作学を学んだばかりの青年黄盈豪であった。盈豪は直ちに現地に赴き様々な活動に奔走した。現地の協力者も徐々に巻き込んでいった。2003年には工作ステーションが達観部落に移動したのを機会にさらに活動を拡大していく。

彼はまず達観部落でフィールド調査を始めた。そこで聞いた部落の老人たちの話の中で、たびたび語られるGagaというタイヤル族の祖訓に注目した。Gagaの一つに、「獲物が小さなマタビ1羽だけでも皆で分けて食べるべし、たとえ少しずつでも味は勝るが、こっそり独り占めすれば味は劣るべし。」という教えがある。Gagaはかつての部落に息づいていた伝統的な価値観、一言でいえば「分かち合い」の精神だ。

盈豪の脳裏に、次第に「部落共同厨房」の構想が発酵していった。部落に共同の厨房を建設しよう！その農園で野菜も栽培し、食事を作って共に食べる。さらに支援がない近隣の老人たちに食事配達サービスの活動を行う。最も簡単な「食べる」ということから出発して、かつての「共食共享（共に食べ共に楽しむ）」というメカニズムを回復したいという夢だ。

「今では部落の生活もすっかり変わってしまったよ。」仲間たちは最初この考えに懐疑的だった。しかし、最後にはやってみようということになった。政府関係の資金を導入し、ボランティアの力を借り、簡素な味わいの開放的な空間、タイヤルの伝統や生態に配慮した達観部落共同厨房「L'olu 部落厨房」を自力で建設した。手作りにこだわった。そして2005年6月いよいよオープンにこぎつけたのだ。



厨房ママさんが作るタイヤル料理。豚肉の酒漬け、溪流の天然魚、農園の野菜炒め、タイヤル伝統のお菓子などが竹製のザルに盛られている。なかなかの美味だ。

盈豪は、「本当に地域を支援しようと思えば、長期間関わらないとだめだ」とよく口にする。彼は達観部落におよそ5年間住み着いて活動を続けた。2006年には、大安溪部落に対する支援活動を確立するため、地域の活動メンバーたちと原住民深耕徳瑪汶協會を設立、秘書長の役目に担った。

私は2007年にもう一度達観の部落厨房を訪れる機会を得た。そこには伝統織物など部落の産品も並べられていた。活動は確実にその力量を高めていた。しかし、いずれは政府の補助が終了する。商業システムと部落の互助の道理とは本質的に衝突する。盈豪や仲間たちは経営産業化の可能性について討議を始め、市場経済に入りながら自分たちの力で厨房の活路を見出そうと考えていた。持続問題は彼らにとって常に大きなテーマなのだ。

盈豪は、原住民深耕徳瑪汶協會秘書長として達観に関わりながら、一方でこうした経験をもとに社会工作の研究者としてのキャリアを積み始めた。以後私は達観を訪れていない。部落厨房はどのような展開をしているのだろうか。今回ネットで確認してみると「新部落厨房オープン」という記事が見つかった。

嘗ての部落厨房は、前村長の格段の計らいで15年という長期間の借地を利用していた。2018年2月でその借地期間が切れるため、部落厨房移転が課題になっていた。そこで深耕徳瑪汶協會は、建設資金の基金を募り、達観部落で土地を購入、最近元の厨房と同じようにボランティアと共に新厨房を完成させたということだ。

地震発生からやがて20年を迎えようとしている。ここまで活動を持続させてきた熱意に敬意を表したい。新厨房の課題も多いだろうが、その前途に期待したい。もし、機会があれば新厨房を訪ねたいと思う。